



## 赤い蠟燭 (6)

みんな花火を見ることは好きでしたが火をつけに行くことは、好きでなかったのであります。

これでは花火はあがりません。そこでくじをひいて、火をつけに行くものを決めることになりました。第一にあたったものは亀でありました。

亀は元気を出して花火の方へやって行きました。だがうまく火を





## 赤い蠟燭 (7)

つけることが出来たでしょうか。  
いえ、いえ。亀は花火のそばまで  
来ると首が自然に引込んでしまっ  
て出て来なかったのではありません。  
そこでくじがまたひかれて、こ  
んどは鼯ひっこが行くことになりました。  
いたち鼯は亀よりは幾分ましでした。と  
いうのは首を引込めてしまわなか  
ったからであります。しかし鼯は  
ひどい近眼でありました。だから



## 赤い蠟燭 (8)

蠟燭のまわりをきよろきよろとう  
ろついているばかりでありました。

とうとう

遂々猪が飛出しました。猪は全

けだもの

く勇しい獣でした。猪はほんとう

にやっていって火をつけてしまいま  
した。

みんなはびっくりして草むらに  
飛込み耳を固くふさぎました。耳  
ばかりでなく眼もふさいでしま  
いました。





## 赤い蠟燭 (9)

---

しかし蠟燭はぽんともいわずに  
静かに燃えているばかりでした。

おわり

---

